

シンポジウム 14：在宅医療をすべての地域に！

演題名	医師 3 年目からの診療所長
-----	----------------

概要

「今度山北というところで診療所やるんだけど行く？」ある居酒屋で吉新先生（地域医療振興協会理事長）の隣にたまたま座ったことから私の山北診療所派遣の話が始まりました。3 年目医師が診療所開設から任されるなんてあるはずないと思い、当初ノリで「はい、行きたいです～」と答えていました。しかしよく考えればこんな貴重な経験することはなかなかないと思い、飛ばされるというよりむしろ私から願い出て派遣してもらうという恰好になりました。飲み会のノリで大きく人生が変わっていくというのもおもしろいのではないと思っています。

山北診療所は神奈川県西端、静岡県との県境付近で、最寄りのコンビニが 5km 先、町内に信号のある交差点が 15 か所以下という山間僻地にあります。開設からということで、ついこの前まで初期研修医だった私が面接官としてスタッフの採用にあたり、名刺片手に町長、医師会長、後方病院院長、自治会長へと挨拶回りを行いました。診療時間、医療機器、患者の導線など今まで決められたやり方に従うだけだったのを自分で決めていくというクリエイティブな仕事でした。

診療所周辺は交通手段も乏しいので当然在宅医療も行いました。初期研修中にドクターゴン診療所で在宅医療の勉強をさせていただいた経験を生かし、見よう見まねでやっていきました。在宅での看取りもしましたが、そこにあるのは死の悲惨さよりも、涙を流しながらも満足感いっぱいの家族の姿がありました。人の命を救うことができたとき、病を治して患者を苦しみから解き放つことができたとき、それは医師として最高の喜びであります。マスコミも「神の手をもつ医師」「スーパードクター」と讃えます。しかし、人の死という人生の中で最も重要なターンを納得のいく形で迎えさせることができたとき、それもまた医師として大いなる喜びであると私は考えます。

医師のスキルの伸び盛りの時期を一人診療所に行くということで、一部では学徒動員と揶揄されたりもしました。確実に成長できているのか、将来への不安は常にありました。しかし、与えられた環境で努力する姿勢を忘れなければ次どこへ行ってもやっていけると信じ、日々全力で楽しみながら地域医療を行ってまいりました。今現在はまた都市部病院でさらなる修練を積んでいるところですが、これからも在宅医療をはじめとして都市でも僻地でも活躍できる医師になりたいと思っています。